

シンポジウム「活字の力～若者にも伝えたい」

人間の豊かさ

思いやりの心を生む

読書や言葉の魅力を考えるシンポジウム「活字の力～若者にも伝えたい」(文字・活字文化推進機構と日本経済新聞社の共催)が9月14日、東京・大手町の日経ホールで開かれた。学生応援プロジェクトの一環。作家の道尾秀介氏がトークショー(聞き手は書評家の杉江松恋氏)で自らの読書・創作体験を語った後、日本ユニシス特別顧問の島田精一氏、言語脳科学者の酒井邦嘉氏、社会学者の古市憲寿氏、童話作家の肥田美代子氏がパネル討論(司会はテレビ東京アナウンサーの須黒清華氏)で活字の持つ力について話し合った。

読書の喜び

杉江松恋 本を読まない子どもは多かった。道尾秀介 周りに本を読む人がいなくて、絵本や国語の教科書を読んだことばかりで、初めは高学年、17歳のとき。当時、お付き合いさせてもらっていた女の子が純文学マニアでした。自分の彼女に何かで負けるというよりは、読書の楽しさを伝えたかった。僕も何か読もうと本屋さんにいったけれど、それがいいか分からない。その中で、太宰治『人間失格』だけは知っていました。しかも文庫で薄かったので、これなら読めるかなと。

道尾氏トークショー「読んできた!書いてきた!」



作家 道尾 秀介氏

道尾 大金を何冊か読んで、川端康成に行きました。あとは探偵、金田一、耕助シリーズの横溝、高橋のころに『月と鏡』が再来、角川文庫の黒い表紙の横溝作品が書店の棚に並び、並んでいました。横溝を読んだら、『11月の夜』をシリーズと呼ぶのか」と知り

杉江 自分が一番の読者というところですか。道尾 それが作家の務めのような気がします。家電メーカーの社長や社員は基本的に自分のところで使った家電を自分の家で使っています。使い勝手は実際に使わないと分かりません。小説も同じ。自分の作品を楽しめなければ、小説を生産するメーカーとしての作家は衰退していきます。

杉江 「万人にウケるような小説は、自分ではおもしろいと思わない」とも言っていた気がしますが。道尾 10人が10人おもしろいと言った、翌日にはよく味を覚えないように

味わい方読者に任せる

杉江 自分が書いた小説は自分の趣味と100%合っているの面白くないという、若き特有の勘違いから始まり、20年近くたりましたが、勘違いが読まれていく。杉江 自分が一番の読者というところですか。道尾 それが作家の務めのような気がします。家電メーカーの社長や社員は基本的に自分のところで使った家電を自分の家で使っています。使い勝手は実際に使わないと分かりません。小説も同じ。自分の作品を楽しめなければ、小説を生産するメーカーとしての作家は衰退していきます。



聞き手 杉江 松恋氏 (書評家)

杉江 読者の側には関係があり、読者の側に受け入れる姿勢がなければ、道尾 そうですね。僕は小説を書きながら、ギリギリ神話のプロクリステスという盗賊の話を出し、プロクリステスは通りかかる旅人に向かってきては鉄のベッドに寝かせ、足が飛び出したら足をぎゅんぎゅん切られ、短ければ足を引き伸ばしてサイスに合うようにして寝かせていました。



文字・活字文化推進機構副会長 阿刀田 高氏

数年前、サブアラビアに初めて行って来た。大きな町に行くと、(1)はマンハッタンではないかと思ってしまう。高層ビルが建っていて、本道にびっけりして、どうしてこんなに発展したのかと、世界有数の石油産出国だからかという。自国で産出される石油を使って国を豊かにしよう。

高い識字率 国力につなぐ

阿刀田 高氏 識字率90%を超えており、これは世界的に見たら大変な数字です。例えば南米やアフリカでも、識字率90%以上は読めるようになっています。日本は明治以降、高い識字率という財産によって、国づくりをしてきたわけで、それを今、簡単に手放してはならない。その力を日本を豊かにするために使っていくのが、今、まさにこの問題に直面している。私は考えています。情報獲得手段として新聞も含めて活字を読むことは、決して減りません。何かを知りたいと、どこか、その情報源を求めていくのは、減税適用を求めたい。

トークショー、パネル討論に出てきた主な本

- 『人間失格』(太宰治著、集英社文庫ほか)「第一の手記」が「恥の多い生涯を送って来ました」で始まる無頼派作家の自伝的小説。
- 『掌の小説』(川端康成著、新潮文庫)ノーベル賞作家が40年以上書き続けた掌編小説を収める。最初は111編だったが、後に11編加わり122編となった。
- 『球体の蛇』(道尾秀介著、角川文庫)幼なじみの死の秘密を抱えた17歳の「私」が主人公。ウソをめぐる物語は青春の残酷さと美しさをあぶり出す。
- 『星の王子さま』(サン＝テグジュペリ著、岩波書店ほか)「大切なものは目に見えない」など人生を考えさせる言葉に満ちた大人のための童話。
- 『山椒大夫・高瀬舟』(森嶋外著、新潮文庫ほか)「山椒大夫」では悲劇的な運命に翻弄される姉弟を描き、「高瀬舟」では安楽死の問題に触れている。
- 『高杉晋作一わが風雲の詩』(古川薫著、文春文庫)志半ばで早世した維新の志士の生涯を、同郷の作家が濃厚な筆致で描いた長編小説。
- 『藤子・F・不二雄大全 SF・異色短編』(藤子・F・不二雄著、小学館)青年向け漫画誌「ビッグコミック」などに掲載された作品を収録。
- 『大地』(パール・バック著、新潮文庫ほか)ノーベル賞に輝いた米国籍作家の代表作。19世紀から20世紀にかけての中国で、大地に生きてきた3世代の物語。
- 『イタリヤ紀行』(ゲーテ著、岩波文庫ほか)ドイツの文豪が18世紀後半にイタリヤを旅した経験に基づく旅行記。
- 『寺田寅彦随筆集』(寺田寅彦著、岩波文庫)物理学者で随筆家だった著者のエッセー集。「科学者とあたま」は第4巻に収められている。

